

# 国 語 科

石 川 誠  
田 川 信 子  
草 鹿 万 里

## 1 国語科の本質について

私たちは国語科の本質を次のようにとらえている。

豊かな言語生活を営むことができる力や態度を培うこと

学校教育における教科等のすべてが学習者の人間形成を目指すものであることはいうまでもない。そして、国語科における人間形成とは、言語の教育を通しての人間形成であり、それは豊かな言語生活を営むことができる力や態度を培うことにあるととらえた。

我々にとって、言語生活を営むということは、言語としての国語を読む、書く、聞く、話すことはもちろんのこと、これらの言語活動を通して思考を深めたり、想像を膨らませたり、心を育んでいくことを意味している。さらに、他者と言語を通してコミュニケーションを持つということでもある。

したがって、豊かな言語生活を営むということは、言語を通して思考力、想像力、言語感覚を養うとともに、豊かな心情を培うことであり、他者との関係のなかで豊かな人間性を育むことにつながると思う。

すなわち、学校教育において豊かな言語生活を営むことができる力や態度を培うことは、一人一人の人間性を形成するためにも、文化継承・創造のためにも大切なことであり、それが、国語科の本質であると考えた。

## 2 本質にもとづく基礎・基本について

上記の本質から国語科の基礎・基本を次のようにとらえた。

国語を適切に表現し正確に理解すること

上記でとらえた「豊かな言語生活を営むことができる力や態度を培う」という本質に迫るためには、国語を適切に表現し正確に理解することが大切であると考えた。

国語を表現するとは、国語で書く、話すことである。適切に表現するとは、まず、文字言語を正しく書いたり、表記や語句に関するものを正しく書いたり、文法的に正しく書いたり、はっきりとした発音で話したりすることである。その上で、具体的な場面で目的に応じて、適切に書いたり、話したりすることである。

また、国語を理解するとは、国語を読む、聞くことである。正確に理解するとは、まず、記号としての文字言語を正しく読んだり、表記や語句に関するものを正しく認識したり、音声言語を発音した通りに正しく聞くことである。その上で、具体的な場面で言語が表す内容を正しく読みとったり、聞きとったりすることである。

このようなことができれば国語による言語情報から思考したり想像したり言語感覚を働かせたりしようとするとき、より深い思考に入り込んだり、より豊かに想像したりすることが可能となる。逆に、言語によって情報を発信しようとするとき意図したことがより適切に表現でき、うまく相手に伝えることができる。

表現と理解は切り離されるものではない。表現する活動と理解する活動を多く経験することは、この相互作用が繰り返されることとなり、豊かな言語生活を営む力を培うことになるのである。また、あわせて、豊かな言語生活を営むことができる態度も育てることになる。

以上のことから、上記のことを基礎・基本としてとらえ本質に迫っていけると考えている。

### 3 自己の学びを広げ深めるについて

国語科において、自己の学びを広げ深めるとは、「主体的な言語活動を通して、自己の変容を自覚すること」ととらえる。

そのために、次の点に留意して実際に学習を進めていきたい。

#### (1) 何ができる何ができないかを把握し、実態に合った教材を選ぶ

子どもたちの実態を把握し、「こんな力をつけてやりたい」という願いをもとに、この単元が終わった時の子どもの姿を想定したうえで教材を選ぶ。そして、選んだ教材と教師の願いをもとに子どもたちの実態に合った単元を構成していく。

#### (2) 子どもが自分なりにつかんだことを見て取り生かしたゆとりある授業展開を構想する

確かな国語力は、学ぶ主体者としての子ども自身が問題解決しようとすることで身につけていく。自分の生活経験や学習経験を生かして自分なりに言語に向き合う活動を取り入れ、子どもが言語と自分なりに出会い、つかんだことを生かした授業展開をする。そのために、自己学習の場をもつなどして、十分時間を確保し、ゆとりを持った学習となるよう心がける。

#### (3) お互いの考えを聴き合い話し合う場を設定する

一人一人が読みとったこと、考えたこと、根拠となるものを聴き合い話し合い、練り上げていく活動を通して自分自身の読みとりや思考が高まっていくことになる。自分なりに読みとったことを様々な表現方法で聴き合い話し合うことによって新しい知識を得たり、曖昧だった考えが確かになったりして新たな自分をつくることができると考えた。その際、聴き合う場は必ずしもクラス全体とは限らず小グループ、ペアなどが考えられる。

#### (4) 自己の変容に気づくために書く場を保障する

その単元で学習したことを終末にふりかえり、自分が得た内容や力を自覚することは、次単元への意欲にもつながり、ひいては、これからの日常生活の中で起こるであろうさまざまな言語活動の場の中に生きてくると考える。その際、書く活動を取り入れることによって、学習の結果を目に見えるものにするには、自分の学習過程をふりかえり、自己の変容を自覚するのに欠かせないことである。そして、それは、新たな意欲や自信につながっていくと考える。